

NUN登頂'83

ボクらは遙にK2をナンガを見た

HAJカシミールヒマラヤ遠征隊1983年



● 目 次 ●

序	稲田定重	1
遠征を終えて	飛田和夫	4
隊員構成、ヌン峰概念図		5
発端から出発まで	飛田和夫	6
渉外報告	角田不二	7
活動の記録		
往路キャラバン	坂入一彦	8
登攀活動	飛田和夫	9
登頂記	熊田雅史	12
ヌン西稜の登攀ルートについて	角田不二	13
帰路キャラバン	天城敞彦	15
行動表		16
各係の報告から		
装 備	細貝 登	17
食 糧	天城敞彦	18
医 療	大久保博	20
会 計	角田不二	20
ヌン登山隊に参加して		21
英文概要		24
協力者名簿		

写真 坂入一彦・飛田和夫

序

ヌンは、HAJにとって因縁深い山である。今日のHAJの高所登山の基礎をつくった Expedition 研究グループが最初にとり組んだ遠征がラムジュン・ヒマールとヌン・クンであった。ヌン・クンは“未登峰、未踏査の地域、入域困難な地域をめざす遠征”として設定されたのである。当時、この山域はインナーラインの関係から通常的手段では入れず、ためにインドとの合同登山ということと推進されていたのである。現在、この山域は、インドで最もポピュラーなエリアとして各登山シーズンを通じて空いている間もないほど各国隊が入っている。昔日の感がある。75年ヌン隊は頂上直下で涙をのみ、同時に送ったガルワール隊は未登の3座を手中にした。厳しい反省の中で、残った者は互いを更に確かめ合い、カンチェンジュンガへと夢をひとつにして行くことになる。

78年HAJヒマラヤ登山学校は、奇しくもまたヌンとガルワール（トリスル）に分けて送られた。幸いにも両隊とも登頂に成功したが、参加隊員のその後の軌跡は全く対照的となっている。トリスル隊19名のうち、延14名が6,000m～8,000m峰の登山を主としてHAJ隊で経験している。今回、隊長をつとめた飛田君、副隊長の角田君にとって最初のヒマラヤの頂はトリスルであったし最初の8,000m峰の頂はともにヤルン・カンであった。かつて、トリスル隊の隊長をつとめた者として、その後の両君のめざましい飛翔は自分のことのようにうれしく思われてならない。そして、この夏、ニューデリーでうれしい便りをまた聞くことができた。8月26日、ブータンでの仕事を終えてニューデリーに着いたその夜、ホテル・タージパレスに角田君の伝言があった。「ヌンは登頂しました全員無事です」と。こみあげる喜びがあった。

HAJの遠征はそのほとんどが広域チームである。口さがない人はそれを“寄せ集めのチーム”と言うが、百の論争もひとつの実証には及ばない。志を同じくする人間の固いきずなを知った者こそ幸福である。苦しみと喜びと、時に大いなる悲しみをも共にしながら乗り越えてきた幾星霜。その中でつちかわれてきた互いの信頼はこれからもすばらしい夢を育てて行くことだろう。

83年ヌン隊が築いた人間のきずなが、将来に向けて更に太く、強く育って行くことを信じたい。そして、限らない高みを追い続けて行くであろうHAJの中にあって更に壮大な燃焼を試みられんことを切に願うものである。

1983年11月

稲田定重（日本ヒマラヤ協会専務理事）



▼BCにて



坂入

天城

大久保
飛田

角田

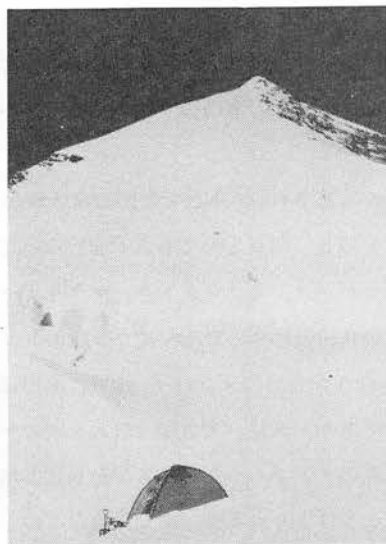
スンダリ
ラーツ
ラクパ

熊田

細貝



スノープラトーからヌン・クン▲



◀C3 (6300m) と
ヌン

▼C1 からD41峰



▼C3 への荷上げ
(セラック帯の通過)



遠征を終えて

1983年8月16日。白く輝くヌンの頂から角田副隊長の声が届いた。「9時20分、着きました。K2がナンガが見えます。」

一つのことが終わった。ピークを踏んだのは3名だったが、全員無事に下山し終る事が出来た。インド・ヒマラヤ北西部に位置するジャム&カシミール州のヌン・クン山群の一峰。ピークに立ちたい。ピークに立つ事を次のステップ^①としたい等々の人達7名が目指したヌン（7,135m）だった。

緑と湖のスリナガルからゾージ・ラを越すと風景は一変して岩と砂の世界、寒暑の差がはげしい砂漠の気候の世界に入る。初めて体験するその気候にとまどいながらも高度順化を行なった後、センチック氷河の末端、十数種類の花と清らかな水に囲まれた4,100m地点にBCを設営した。

BC設営後、不調者もあったがルートは順調に伸びていった。初めてスノープラト^②に上った時はかすかな興奮さもあり、ガスの間に間にヌン・クンが望めた時はジッと見とれるままであった。見え隠れするヌンの山容は神秘的でさえあった。

不調者も順次回復し、悪天の中でのルート工作と荷上が行なわれた。C3（6,300m）までのルート工作と荷上を終了させて全員がBCに下降し休養をした後に、アタックが開始された。登山開始以来最高の天候の下でアタックは成功した。結果的にピークに立ったのは3名だった。高度順化、技術、体力等の様様の要素を要求された今回のヌンは全員をピークに立たせてくれなかったが、ヌンを目指して活動してきた事はメンバー全員が自負している。その事は必ず次のステップへのスタンスとなっているのではないかと思う。

'78年よりヒマラヤ登山学校が実施され、そして今回の遠征がなされてきたが、目的とする次のステップと受止めた人達はそれぞれが隊長、隊員としてEXPを行なっている。カンチェンジュガ、マナスル、ガッシャーブルムI峰、シシャパンマ、ランタン・リ、ケダルナート、バギラッティ^③II等々の山々へ。

今後の計画として、副隊長の角田は昨年の登山学校クン隊のメンバーを主力として、'84年にナンガパルバットへ。私は'85年にK2へ向うが今回のメンバー、細貝、熊田は参加希望をしている。2人のヌンの経験がどこまで出せるか楽しみであり、天城、大久保、坂入も次のチャンスを狙っているのは確実である。

出国して帰国するまで35日間のヌンであったが、ヌンを通じて培われてきた「なにか」が今後に生かせるなら、ヌンの頂は、ヌンの山容はより大きく、より貴重なものとなるのではないかと考えている。

付け加えるなら、飛田、角田は'78年日本ヒマラヤ協会ヒマラヤ登山学校トリスル隊のメンバーであった。

隊長 飛田 和夫

● 隊員構成 ●

隊長 飛田和夫 (37) 昭. 21. 1. 生
〒183 東京都府中市

記録 坂入一彦 (27) 昭. 30. 6. 生
〒307 茨城県結城市

国鉄勤務 国鉄立峰山岳会
副隊長 角田不二 (30) 昭. 27. 9. 生
〒336 埼玉県浦和市

坂入硝子店勤務 アップル同人
梱包 熊田雅史 (27) 昭. 31. 2. 生
〒173 東京都板橋区

(株)アド三協勤務 明大駿台山岳部OB
食糧 天城敏彦 (36) 昭. 22. 5. 生
〒160 東京都新宿区

明大駿台山岳部OB
リエゾン・オフィサー Fit Lt Tk RATH
(32) AIR FORCE
Sambra Belgaum 591124

(株)有斐閣勤務
医療 大久保博 (33) 昭. 24. 4. 生
〒112 東京都文京区

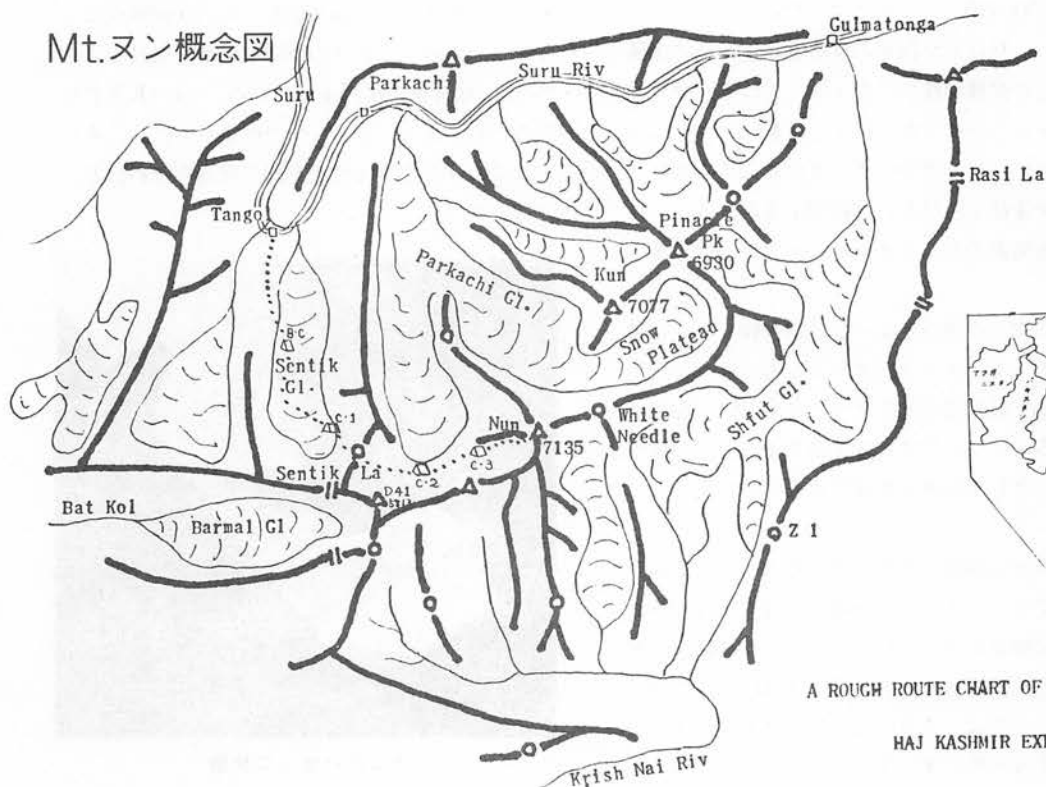
コック Sunder Sherpa (35)
Full Bare Basti TN Road
Po Darjeeling INDIA
キッチン Lakpa Sherpa (17)
c/o Shikhar Travels (P) LTD
1701 Nirmal Tower, 26
Barakhamba Road, New Delhi-110001,
INDIA

都立城北養護学校勤務
装備 細貝 登 (29) 昭. 28. 10. 生
〒379-11 群馬県勢多郡

造園業

前橋山岳会

Mt.ヌン概念図



A ROUGH ROUTE CHART OF PEAK/PEAKS

HAJ KASHMIR EXPEDITION 1983.

発端から出発まで

飛田和夫

1981年9月27日～28日、ヒマラヤ全域をおそった豪雪により7名のメンバーが帰らなかった。日本ヒマラヤ協会ヒマラヤ登山学校のナンダ・カート登山隊メンバーだった。この遭難は日本ヒマラヤ協会にとっても、以前登山学校に参加した私にとっても痛恨の出来ごとであり、ヒマラヤ登山学校組織の基礎をゆるがす強烈なものであったと思う。

種々検討の結果、翌年も実施された。ヒマラヤに精通するインストラクターによる強力に組織されたクン登山隊だったが、落石により1名の死亡事故が発生し遠征は終了した。あらためてヒマラヤ登山の事故発生要因の複雑さをたきつけられ、今後ヒマラヤに向かおうとする意志を削りそがれる思いであった。

それらの事故と、年を重ねるごとに登山学校に参加する側の思考も変化することにより、ヒマラヤ登山学校は中止の方向となった。

しかし、私自身が78年の登山学校、トリスル隊に参加した動機同様に、会・個人ではヒマラヤに行くチャンスがないが、何としてもヒマラヤに行ってみたい、ヒマラヤのピークに立ってみたい、ヒマラヤ遠征を学びたいと願望する人はあり、以前に計画発表のあったヌン隊にメンバーが集まっていた。

すでに中止の方向となった登山学校なので、参加希望者、インストラクター予定者、協会で話し合いを進め、最終的に日本ヒマラヤ協会内の遠征に参加するメンバーによって推進する一般的な遠征スタイルとして計画・実施することを決定していた。

各担当毎に調査・研究が開始され、毎月2回のペースでミーティングが開かれ隊長又は副隊長を中心に検討が加えられていった。参加者が関東周辺なので、ミーティングにはほぼ全員の顔があった。合宿は、2月の白毛門を始めに、3月の谷川岳と八ヶ岳、4～5月にかけての富士山、下

旬のツヅラ岩、6月は再度富士山で行なった。合宿の計画についても、メンバーが1回は計画担当者となり、計画の組立・運営を行なう事が出来た。

そして遠征のおおづめ、ほんとうに行くんだと不退転の気持を引出させる買出しと梱包、業者渡しを7月上旬に終了させ、壮行会には会場狭しと多くの方々に出席していただいた。

計画の発端から出発まで様々の事があった。遠征を行なうのかどうかの話し合いや、メンバーの変更と副隊長の変更もあったが、メンバー個々がヒマラヤに、ヌンに行くんだという固い意志が固まることにより、計画の検討と合宿は順調に進んだ。固い意志と確固たる目的意識はひとつひとつの障害をのり越える源となり、出発にこぎつけることが出来た。

が、今回程全員が無事に下山しなければならないという使命にも似た気持を、計画の発端から出発まで抱かずにいた事はなかった。今回隊長になったというめぐり合せの宿命なのかも知れないが、それは、私自身の隊の運営のため、今後のEXPの礎のため、また、日本ヒマラヤ協会のため、そしてなによりも無事に帰宅を待つ家族のためにも、であった。



カニのハサミの登攀

通関、ウォーキートーキーの許可、デリー〜ベースキャンプのトランスポート及びその間の隊員の宿泊手配といった主たる遠征業務はいっさいシカルトラベル社に一任した。したがって隊独自で行なう渉外業務は、IMFとの打合せ、日本大使館への報告とあいさつ、スリナガール及びカルギルにおけるツーリスト・オフィスのマウンテニアリングセクションへの報告、それに若干の買い出しといった程度である。通関やウォーキートーキー許可取得の際はエージェンスタッフに同行して、必要な時にサインをすればよいだけである。

渉外業務の基礎的なことはHAJ発行の「インドヒマラヤの手引」に完璧に記されているので、ここでは、特にカシミールサイドに的を絞って若干の注意事項を述べておく。

◎スリナガールで

スリナガールに着いたら、必ず州政府観光局のツーリストセンター内のマウンテニアリングセクションを訪ねたい。すべての登山隊は、ここのチーフのMr.アシュラフ宛にIMFから隊に関する連絡事項をしたためたレターを託されている（普通連絡官が持参している）ので、いずれにしても寄らねばならない。

Mr.アシュラフは長くここの椅子にすわっており、カシミールの山の情況（アプローチマーチ）には非常によく通じており、その年の先行している登山隊の情報などもよくキャッチしているので、話をすれば、有益な情報がかなり得られる筈である。

ここでもIMFや日本大使館と同じように、登山隊の英文サマリーとメンバーリストぐらゐは用意していくべきである。

マウンテニアリングセクションだけでなく、このツーリストオフィスは大変充実しており、宿の手配や車のチャーターなど何でもできるし、銀行、郵便局まで併設されていて便利である。

◎カルギルで

ヌン及びクンに登る場合、カルギルではヘルスチェックとエクイプメントチェックという難題が控えている。この結果いかんでは、隊員の行動に注文をつけられたり、甚しい場合は何日かカルギルに停滞させられることもあり得る。

まずエクイプメントだが、これは医療用酸素を携行しているかどうかに重点が置かれる。あと医薬品のチェックと。時にはウォーキートーキーも調べられる。これらはいずれも安全登山のために必要な品物だが、カルギルでの検査をスムーズにパスするためにも必携品といえる。

次にヘルスチェックだが、これは山にまったく素人の医師が脈と血圧を検査するのみである。このデータのみで、場合によっては隊の行動にクレームをつけてくるのは、登山隊の側から見れば不本意なことだが、現時点では如何ともし難い。

特にヒマラヤ初見参の隊員が3日も長時間バスに揺られ、日本とは極端に異なる砂漠の風土に足を踏み入れ、3,500mの峠を越えてくれば多少は疲労もしくは緊張するのは当然であり、ましてそのあげくに毛むくじらのインド人医師にいきなり腕をつかまれれば、ナイーブな人間なら血圧が上がることもあろうというものだ。

これに対しては以下のような対策が考えられる。

①日本を出てからカルギルに着くまでの行程をゆったりと組んで、疲労を少なくする。

②できればカルギルに2泊し、2泊したあとの朝にヘルスチェックを受けるようにする。

③不安な人はヘルスチェック前に精神安定剤を服用する。

我々は①と③についてはそのとおりに留意したが、②については1泊だけで通過した。カルギルのエクスペディションオフィサー G.M.Kakpori氏からは2泊するようすすめられたが、「標高の低いカルギルに停滞することは、高度順応のためにはあまり意味がない。タンゴールで2泊し、順応トレーニングを行なってBC入りするのがベターである」と説得し、了解してもらった。

実際タンゴールはカルギルから4～5時間程度なので、午前中にチェックを済ませて、午後からのんびり出発しても充分日没前に着ける訳である。しかしシャフト氷河に入る場合は、グルマトンガが起点になり、10時間ぐらいかかるので、カルギルに2泊したほうがよいかもしれない。

1983年春の登山隊で、カルギルに5泊することを強要された隊があったようだが、ヘルスチェックでまずいデータが出たうえに医療用酸素を携行していなかったことが原因のようである。登山隊側が留意すべき点を留意し、誠意を持って話し合うようにすれば、カルギルのオフィサーたちも決してわからない人達ではない。

なお、これらのチェックはいずれもツーリストオフィス（町の中心部の山の手の方にある）で行なわれるが、ポリスオフィスにも届出はしなければならない。

◎パニカルで

前記カルギルでのチェックを済ませたら、証明書をもらえるので、これをパニカルのツーリストオフィサー（Mr.Fusein）に提示する。ただし、Mr.Fuseinはどのような訳かカルギルに出てきていることが多いので、その場合はパニカルのツーリスト

オフィスには行く必要はなく、ポリスオフィスでパスポートチェックをするのみである。

Fuseinがカルギルにいる時は、必ずカルギルのツーリストオフィスに顔を出しているのので、そこで会える。

なおパニカルは米、アタ、若干の野菜類と日用雑貨品が入手できる最後の村である。もちろん量は多くない。

◎タンゴールで

ここではポーターの調達と、あとはせいぜい羊を買う程度であるが、村はずれに幕営すると、たいてい村長さんがやって来る。彼にだけは多少敬意を表したほうが無難であろう。

◎その他

無線施設はパニカル及びカルギルにあり、ここからスリナガールのアシュラフのオフィスに連絡が取れる。エマージェンシーの際は、パニカルまで誰かを走らせればよい訳だが、たまにこの無線は通じないことがある。パニカル～カルギル間は定期バスの便もあるので、その場合はカルギルまで行けばよい。

活動の記録

◎NUNめざして

——往路キャラバン——

7月24日 本隊6名成田発。

7月25日 デリー着。YMCAホテルで汗を流してから倉庫より装備・食糧を出す。まもなく到着したバスに荷を積み込むと、薄暗い中を6時に出発。途中バスの故障のため2時間程遅れて、マンサール湖畔のツーリスト・バンガローに21時に着く。湖岸の茂みにクリスマスツリーの豆ランブのように光るホテルが印象的だった。

7月26日 雨の中を6時出発。峠を越えカシミ

ールバレーに入ると雪を頂く山々が見えてくる。スリナガールのホテル・インターナショナルに15時到着。

7月27日 午前中は野菜の買出しと梱包。午後には自由時間となるが、皆葉書を書くのに忙しい。郵便局に行った帰りに町をぶらつく。

7月28日 8時バスでカルギルに向う。ガタゴト揺られて雪の残るゾージ・ラ峠を越えると、それまでの緑豊かな景色は一変して赤茶けた山肌が連なる荒涼とした風景になる。こんな景色ばかり眺めていると心の中まで乾燥してしまいそうだ。時々現われる集落の周りの緑にはっと息をつく。カルギルの街はずれにあるホテル・ゾージ・ラに

17時に着く。ここでJACのZ1隊、水戸葵のクン隊に会い、夜は思いがけない交歓会になる。

7月29日 午前中はヘルスチェックのためにツーリスト・オフィスと病院に行く。全員バス。13時トラックで出発。スル川に沿って砂漠のような景色の中を進む。点在する緑の中に岩と見まちがうような土造りの家が見え、モスクだけが文化を感じさせる。このような所にも人が住んでいるとは驚くばかりだ。やがて川が大きく右に曲るとヌンが姿を見せる。この次ヌンに会えるのはスノーブラトーからだ。タンゴールの草原に17時着。

7月30日 今日は順化のためBCまで登る。7時30分スタート。タンゴールの人家の間を抜け、花の咲き乱れる草原をゆっくりゆっくり登る。これほど花の多い事は始めてだ。しかし村人が斜面を壊しながら2m程の道を作っている。高山植物は無残にも土砂の下敷きにされている。この美しい草原が消えるのも遠いことではないかもしれない。3時間程でBC予定地に着く。正面にD41が見えるセンチック氷河から流れ出る川のそばの草原だ。この日はタンゴールまで下る。暑い1日だった。

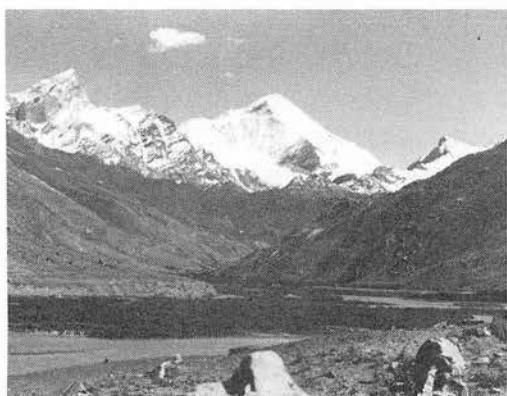
7月31日 6時頃からポーターが集まってくる。それぞれ品定めして気に入った荷を背負って、7時にスタートする。ポーター料金は1日30Rs。10時過ぎにはすべての物資がBCに集結した。

(坂入一彦・記)

◎登攀活動

8月1日 一昨日、タンゴールからBCへの順化行動を行ない、昨日全員BCへ入った。頭痛等を訴える者もいるが特別不調者もなく、眼前にD41を望みセンチック氷河末端付近の草原帯にBCを設営し、今日から約20日間の登攀活動に入る。

C1までの荷上にポーターを雇用しているので今日は全員空身によるC1(4,900m)までの順化行動。氷河の左岸をつめる。モレーンの起伏も少なく、又、いつもの年より雪が多いという事でかなり雪面を歩く。途中から右岸に移り雪面を登った後、モレーンのガレ場を登る。左に見える今にも崩れそうな岩壁を回り込むように支氷河モレーン目指して急な雪面を登りつめると雪の消えた支



スル河とヌン、クン山群

氷河モレーンの一角に達する。歩くスピードもやや鈍くなりがちながら、モレーンを登って行くとキャンプ跡が出てくる、我々のC1予定地。D41からの白い稜線を目でたどれば、一度アイス・フォールをセンチック氷河に落し、次に岩峰をもつ小ピーク、その左で我々がスノー・ブラトーに上ろうとしているアイス・フォールを再び落した後、頭上の大岩壁へと達している。雪が多いためカクレバスを見せていない。頭痛、気分が悪い等々。早目にBCに戻る。

8月2日 メンバーをAチーム(角田、細貝、熊田)Bチーム(飛田、天城、大久保、坂入)とに分けて行動開始の予定だったが、Bチームは不調者が多く、Aチームのみが行動しC1に移動。正午頃、ヌン北稜を目指すスペイン隊(7人)がポーターと共に入山してきた。明日、我々のC1にBCを設営という。一気に4,900mに入山出来るとは……。

8月3日 朝、3人共気分がすぐれないと言っていたが行動する。行動する事によって次第に気分も良くなって来る。

ガレのモレーンを上った所でAチームと8時の交信。アイス・フォール3P目との事。次の10時の交信ではすでにアイス・フォールを抜けてスノー・ブラトーを直進。Bチームは、坂入がC1に到着出来ずに4人がBCに戻る。C1に達することが出来なかった原因は体の不調なのか高度の影響なのか、BCに到着してすこしすると体の不調を訴える。様子が肺水腫らしい。スペイン隊のドクターに様子を伺うため我々のBC近くで休養しているスペインのメンバーから、BCにいるドクタ

ーに連絡をとってもらおう。その間、酸素を吸わせる。次第に脈拍も下りだす。結果的には肺水腫ではないだろうということだったが、万全を期するために角田副隊長がドクターから薬を頂き、BCに下降してきた。BCに到着した時は酸素も薬も必要としない程落付いた。

8月4日 完全に回復させるためには、より高度を下げ休養させることが必要なので一担タンゴール(3,350m)へ。飛田とコックが付き添う。タンゴールにはキッチンを下らせ坂入の面倒をみてもらう。BC入山前にキャンプした地点に一張のテントを張る。下降で疲れたのか横にさせると顔は白っぽくなり、爪の色も同じ様になってきた。横で見ていると非常に不安となってくる。緊急用にBCから携行したO₂パックを吸わせる。毎分3ℓが発生するが、しばらくすると顔、爪にも赤味がさしてきた。ホッとする。その後は正常?に戻った様子なのでトランシーバーを置き、飛田、コックはBCに戻る。

この日、C1の細貝、熊田は休養。角田、天城、大久保はC1に移動。C1にいた細貝は高所に於ける生体反応のため微熱が出て、38度前後の熱が下がらなかった。

8月5日 6時の定時交信、タンゴールの坂入は調子が良くなっている。C1の細貝は熱が下が

らずBCに下降させる。

ガレ場のモレーンを上る付近でC1に移動する飛田とBCへ下降する細貝が逢う。「どうしても熱が下がらない。他は何ともないんですが」と彼。

C1にいた角田、熊田、天城、大久保はスノー・プラトーの最奥、西稜下にC2(5,400m)を決定し湿った雪の降る中C1に下降してきた。

3日に一気に4,900mにBCを設営したスペイン隊も調子の悪い人が続出し、我々のBCへ下降する人が目立った。

8月6日 Bチーム(飛田、天城、大久保)はC2への荷上げ、アイス・フォールを固定ロープによって導びかれスノー・プラトーに上るが、メン・クンはガスのため望めなかった。プラトーは標識に沿って西稜目指して一直線に進む。凹部の一番深い所を越して行くとC2予定地で昨日のデポ品があった。昨日の交信でのスノー・プラトーの端から端まで約3km程ではないかという言葉がうなずけた。Aチーム(角田、熊田)はC2に移動。BチームはC1に戻る。

タンゴールで2泊し、調子の戻った坂入はBCへ。細貝と合流。明朝、調子が良い場合はC1に2人で移動するように連絡。

8月7日 6時の交信でホワイトアウトだったが今は何とかルート工作出来そうとの事。いよいよ



C3への登りからのキシュトワール山群

よ西稜へのアタック。C1のBチームは休養。細貝、坂入がC1に移動してきた。

Aチームは、立ち込めるガスの中をカニのハサミ上部約5,900m程までルート工作したとの事。ルートは氷の部分が多く傾斜がきつい。

調子を取り戻した2人もC1に上り久し振りに元気良くラーメンを食べる。スペイン隊のコックからリングの差入れがあり、調子悪く我々のBCへ下降している人、上部にいる人で現在はコックのみとか。午後、飛田、細貝でアイス・フォールのルート整備に行く。夕方、スペイン隊に夕食を招かれるも食生活の違いから帰ってからお茶漬を食べなおす。

8月8日 ホワイトアウトのためC2は行動が無理で休養、BチームはC1からC2へ移動の予定だったがルートが伸びず、細貝のみが移動。坂入が入ったBチームはC2への荷上と順化行動。

BC入山時2、3日天気が良かったが、どうもすっきりしない天気が続く。移り変りが非常に激しい。夕方になって初めてヌンの全容が望めたという連絡がAチームから入って来た。

8月9日 5時にはテントを打つ雨の音が聞かれたが6時にはもう青空がみられた。Aチームはカニのハサミの上部のセラック帯にルート工作してC3予定地へと進み、BチームはC2に移動した。途中、スノー・プラトールからAチーム3人の姿をガスの中に時々見る事が出来た。BC入山以来、初めて計画通り7名全員がC2に揃う事が出来た。BC付近より摘んできた花を前に全員で黙禱をした。昨年のHAJクン隊の勝山君、同じくHAJ会員の松本正城氏がひきいた隊でヌン北稜での慶野君。それぞれ若くして、ヌン・クン山群に逝った二君の冥福を心から祈った。

8月10日 今日は朝から青空が広がっている。細貝、熊田はBCへ下降、Bチームと角田はC3の決定と荷上げ。

C2から雪壁5Pで西稜のコル。キシウトワール山群が素晴らしい、ブラマー、シッケルムーン等が望める。ヒマラヤにきている実感がわいてきたというメンバー達。

固定ロープによってカニのハサミ、セラック帯を通過するが、雪、岩、氷等傾斜もあり緊張の

ためとまどうメンバーもいる。登るにしたがいスノー・プラトールを一望出来るが、広い。その広いプラトールに一直線に西稜を目指して西稜よりC2。C2から雪壁を登り西稜のコル、カニのハサミへのルート工作を行なってきた。しかも連日のガスの中でのルート工作を先頭で実施してきた角田副隊長、彼の今までの輝やかなしいヒマラヤ登山の経歴と実践にあらためて頭の下る思いである。

昨日の最高到達点に立ったBチーム。天城、大久保、坂入は自己の最高到達点に達していた。そこから約150m程先にC3(6,300m)を決定し、C2に戻った。

8月11日 昨日同様の青空の下を全員BCに下降した。途中、リエゾン・オフィサーのラーツ氏、キッチン(ラクバ君)がジュース持参で我々を迎えてくれた。BC付近の花が一層増えていた。やはりBCは良い。

夕方、アタック隊を発表した。角田、細貝、熊田の3名。

8月12日 休養

8月13日 アタック隊3名がBCを出発しC1に移動。あとは天気のみであろう。

8月14日 アタック隊C2へ移動。サポート隊はBCよりC1に移動。

8月15日 アタック隊C3へ移動、サポート隊はC2にはいり、午後からの晴天を利用してP5,600m峰へ4人で登る。天気は我々に味方をしてくれている様で、今は無風であたたかい。P5,600m峰のピークから16時の交信をすると、C3上部を偵察に向い、今、ルート工作で取込み中という。いったい何が待っていたのか。

18時の定時交信では、クレバスへの工作が終了した事と、ピークへのルートを確認出来た事が伝えられた。そして、サポート隊が一人ずつ激励の言葉。アタック隊も一人ずつ頑張ります、と。いやがうえにも、アタック前の緊張がお互いに感じられた。

8月16日 4時55分アタックが開始された。昨日の夕方から今日の天気は入山以来最高の天気となってくれた。

約2時間後には、6,500mのプラトールから西稜に左上する3人の姿が望める。快調なペースで西稜

に達した3人は皆調子が良く、トランシバーから元気な角田の声が聞かれ西稜の雪稜を登って行く。

C2では、飛田、大久保がテントの外にマットを出し、トランシバーをONにしたまま行動をうかがい、天城、坂入はより3人の行動が望めるような小高い雪の山へと登って行く。

出発の約4時間後、ピークに達する姿が双眼鏡から何となく見えたのだが、トランシバーから声が聞こえない。どうしたんだ。もうピークに着いているはずなのだが。待つ事の苦しさが、緊張が、……、どうした、どうした。

「着きました。今、着きました、K2が、ナंगाが、見えます」という角田副隊長の声がトランシバーから聞こえてきた。9時20分。

そして、熊田、細貝のはずんだ声もトランシバーを通して伝えられた。

C3を撤収して、3人は夕方C2に帰って来た。3人共無事に戻ってきてくれた。握手を交すと感激が一段と深まってきた。

8月17日 今朝も素晴らしい天気。スペイン隊は今日もルートワークと荷上げの様子。北稜上に望める。スペイン隊の成功を祈って我々は全員BCに下った。C1からは隊荷が一段とふくれ上ったが、目的を達した後なので重荷もカバーできる。そして、何といっても、アルコールは格段にうまい。

8月18日 登山活動がすべて終了した今朝、雨が降りだした。我々は、かえってのんびりと休養出来るが、スペイン隊はどうしているだろうか。

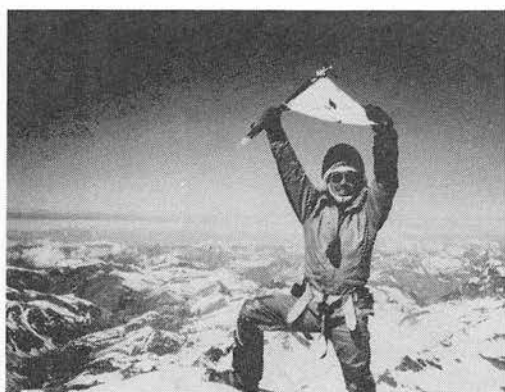
(飛田和夫・記)

◎登頂記

8月15日、角田、細貝、熊田の3名はC2からC3入りをする。フィックスロープ終了点より2ピッチ程上部にC3を設営する。高度計は6,200mを指している。実際はもう200mは高いのではないかと思う。昼少し前に着いたので軽く食事を済ませてC3背後の斜面を偵察しようとするが例によってガスがあたりをおおい始める。このガスには上部のルートワークが始まって以来ずっと泣かされている。上部のスノー・プラトーとC3付近だけがガスにおおわれてしまうのだ。しばらくの間、

テントに入りサラミなど焼きながらゴロゴロする。夕方、少し明るくなってきたので上部の偵察に行く。2ピッチ程行くとクレバスが大きな口を開けている。渡れる所を左上部から捜すが、やっとクレバスの右端に横断可能な所を見つける。ひどく不安定なのでC3に帰りロープとスノーバーを持って行く。フィックスを済ませ渡る頃になるとガスも大部晴れて来て、ヌンの頂上も姿を現わしてきた。上部スノー・プラトーに向って緩斜面を登り始めると西稜までの南西面の氷壁も見ることができルートの全貌が見渡せた。ルートを目で追ってみると西稜の傾斜はそれ程でもない。下部岩稜の上端に向けて南西面をトラバースするのが一番安全な気がした。78年のHAJ隊の第1次アタック隊は南西面の氷壁をダイレクトに近い形で頂上し、直下の西稜に抜けたようだが、真正面からこの氷壁を見上げて下降の事を考えるとやはりトラバースルートしかないと思った。頂上を見上げルートを目で追っていると今までの不安は吹き飛び「やれる！」という自信がムラムラと込み上げて来た。明日は十分やれる。ホワイトアウトが心配だが、アタックはやはり賭けだ。完璧なものなどありはしない、一発当てる気でなければアタックなどできないだろう。絶対登れるという確信を胸にC3へ下降する。

8月16日 午前3時、角田さんの「起きろ」の声でシュラフから飛び起きる。何も考えずシュラフをたたみコンロに火をつける。昨夜の残りゴハンを暖めお茶づけをつくり始める。霜のついたテントで朝食の準備をしていると学生時代の冬山合宿を思い出してしまう。コンロの灯を見つめ一日の無事を祈った。当時の仲間はずでに山を離れ、或る者は山に逝った。そして新しい仲間と共に再びヒマラヤへ来ている。何も考える事はない。今までと同じ様にやれば良いのだ。朝食を済ませて外に出てみる。真暗だが天気はそれ程悪くはない。4時50分C3を出発する。ヘッドランプの光を頼りに上部のクレバスに設置したフィックスを目指して進む。クレバスを渡った所で標識を立て、ユマールをデポする。上部スノー・プラトーを通過する頃は周りも明るくなってきた。南西面のトラバースはプラトーから南西面に突き当たりコブ状



ヌン頂上の熊田隊員

のセラックをまわりこみ、そこから西稜に向け斜上トラバースが開始される。雪面は薄く雪が着いているがその下は堅い氷でアイゼンのツアックを踏みしめながら行く。ここでスリップしたら下のアイス・フォールまですっ飛んでしまうだろう。気の抜けないトラバースが続く。西稜下部の岩稜直下まで来て岩稜の上端へ直上する。ここまで4ピッチ位はあるだろうか、下降時にはロープが欲しい所だ。直上2ピッチ程で西稜に出る。風が強い。少し休みたかったが西稜の行く手には頂上が間近に見え、すぐ登攀を開始する。膝位のラッセルが続く。西稜のリッジの北側をトレースしているので足はもぐるが風はしのげる。時々南西面をのぞき込もうとすると風がすごく冷たい。天気は快晴だ。登攀開始以来、最高の天気ではないか。左手にはひときわ大きくナンガパルバットが見えて来た。遠くカラコルムの山々も見える。一つ見覚えがあるのはK2だろうかとか苦しい呼吸を整えながら時々考える。トップに行く角田さんとの距離も開きがちになり、トップを替らねばと思いつつも差は少しもちぢまらない。北稜と合流する辺りだろうか、岩が出てくる。雪も表面がクラストして歩きづらい。稜線の傾斜が緩くなり、前方の山々が一気に視野に飛び込んで来た時、頂上に着いていた。先に着いた角田さんに握手を求められる。到着は9時35分だ。続いて細貝さんも到着した。荒い呼吸をしながらC2と交信をする。興奮して何をしゃべっているのか自分でもわからない。C2のメンバーが冷静な声でメッセージを送ってくれる。頂上は風が強く、すぐに儀式を行い、周囲の山々をカメラにおさめる。隣のクン西壁も

迫力があるが、やはりこちらの方が高く感じる。100m以上高いのだから当然の事だろう。行動食とお茶を腹につめ込み、9時55分頂上を後にする。予定よりかなり早い到着なので余裕も出て来た。下りはP・Pロープ2本を使いスタカットで下降する。西稜を終え岩稜から南西面へ入ると、雪が腐ってきて、アイゼンがダンゴになり、すぐ下が氷なので始末に悪い。トラバース開始地点から2本のロープをフィックスする。それから2ピッチ程グサグサの雪をスノー・プラトーに向け四つんばいで下る。ここまで来れば安全だ。ホッとする。行動食をつめ込みグラグラと下降するが少し下りすぎてしまいあわてて登り返し、朝のトレースを見つけ安心する。C3には14時40分に到着する。一休みした後テントを撤収してC2に向け帰路に着く。カニのハサミからの下降はアイスピトンが殆ど緩んでいたが気にせずどんどん懸垂下降する。18時C2に到着し飛田隊長をはじめ隊員の方々に迎ええられる。差し出された紅茶を飲むと無事登れた事が実感となってきた。

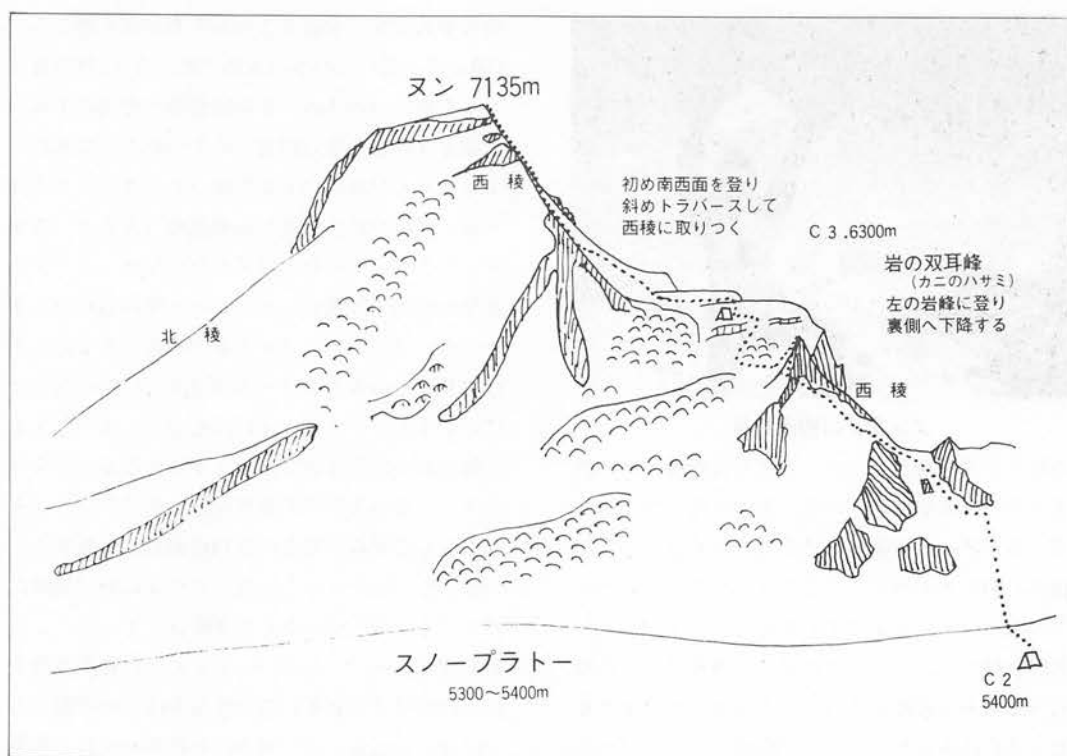
(熊田雅史・記)

◎ヌン西稜の登攀ルートについて

7,000メートルを少し出たクラスの山としてヌン西稜ルートを考えてみると、その困難度はまあ中級の下といったところであろう。これはトリスルのノーマルルートや南稜を初級、ガウリシャンカールやバインターブラックを上級としてみた場合の比較である。

登攀のうえでのポイントをいくつかあげてみよう。

①スノー・プラトーへのアイス・フォール センティック氷河のどんづまりより少し手前のガラ場を登ると、登路が見出される。普通このアイスフォールの手前(約4,900m)にC1を設ける。アイスフォールといっても高差400mほどの単純な雪壁である。傾斜は40からせいぜい50度程度だが、部分的に氷化しているので、フィックスはしたほうがよい。傾斜の比較的急な部分が4ピッチで、あとはだらだら登りとなるが、上部にはクレバス帯があるので、これを越えるまでは張ったほうが安全であろう。我々は合計8ピッチ張った。雪崩



については、豪雪がなければ安全である。

②スノー・プラトー 標高 5,300m ~ 5,400m くらいで、多少うねりがあるが、広大な雪原である。前記のアイス・フォールをあがった地点から西稜の取り付けまで 3km くらいであろう。ホワイトアウトの時は方向がまったくわからなくなるので、赤旗だけはしっかりと立てておかねばならない。

③セラック帯手前の岩峰 2つ並んでいるため、1978年のHAJ隊（沖允人隊長）は、これを「カニのハサミ」と呼んだ。ルートは最初右手のコルにあがり、稜線どうしにつめて、最後は岩壁を左にまいて左手の氷壁を直登する。最後の氷壁は60~70度の傾斜があり、氷も固いので、慎重に行動したいところだ。これを越えると左手の岩峰（約5,900m）にあがり、裏側へ50mほど下降してセラック帯の上部に入る。裏側の下降は雪稜で容易である。

④セラック帯 前記の岩峰の上からセラック帯の地形がよく見えるので、下降する前によく頭に入れておくべきである。ルートは最初のハンギング・グレイシアを左からまいて直上し、2番目のハンギング・グレイシアは右からまき、つづい

てすぐにあらわれる最後のハンギング・グレイシアを左に逃げて段差の少ない部分を越えると上部プラトーの末端に出る。このプラトーをヌン南西面に向かってつめていくと、巨大なクレバスにぶつかる。これは右手のやや不安定なスノー・ブリッジで越えるが、この部分フィックスはばっちりやっておきたい。総じてルートファインディングさえ誤まらなければテクニク的にはイージーである。

⑤南西面～西稜～頂上 上部プラトーをつめると西稜と南稜の岩壁にはさまれた広大な斜面にぶつかる。ルートは最初この南西面を少し登ってから斜上し、適当な所で西稜に出て、あとは西稜を登る。西稜は上部が雪稜で下部が岩稜だが、その境目（大きな岩が2つ見える）あたりで西稜に飛び出すような具合に南西面を登るとよい。力のあるチームならノーザイルで登下降できるが、自信がなかったらスタカットにすべきである。西稜は傾斜は30度程度だが、ナイフリッジだし、南西面は40~45度くらいの氷壁にうっすらと雪がのっており、特に下降の際はいやらしい。なお、西稜は北壁側を登ったほうが楽である。

我々は登りはノーザイルとし、下降は南西面の

途中までスカットで下った。タイムは上部プラト―末端のC 3 (6,300m) からピークまで4時間30分であった。(角田不二・記)

◎登頂を終えて

――帰路キャラバン――

8月21日 ベース撤収の日。予定時間の7時以前からポーター達は集合しはじめる。荷をまとめて7時半過ぎから下りはじめた。途中1人の年配のポーターの荷からテント袋が1つ谷底までこぼれ落ちるという小さな事件があったが、そのポーターが必死になって回収してきてくれて、11時前には人も荷もタンゴールに集結。

今日はタンゴール泊りの予定であったが、トラックの便がありそうということで、1日早くシャバの匂いのするカルギルまで行くことになる。1時半出発、例によってデコボコ道をトラックの荷台で揺られて行くのだが、これもけっこう楽しい。震動に合わせて腰を浮かすタイミングなど覚えながら、スル川に沿って時々現れるオアシスなど眺める。やがてコックのスングリも加わって各自勝手に半ばヤケっぱちのような歌をがなりだす。途中の集落で食べたプーリーというお菓子がとてもうまかった。

6時過ぎカルギル着。ゾージ・ラ・ホテルは満員で近くの川原にテントを張る。手紙が届いていてそれぞれ家族・友人をなつかしむ。これからヌンをめざす「こまくさ」の一行も到着していて、彼らからは日本酒の差入れもあり、にぎやかな酒盛。空気が濃いと酒もうまい。10時過ぎまで楽しい酒盛を続ける。

8月22日 1日カルギル滞在。ホテルのチェックインは12時。それまでテントのそばを離れるなどのお達しがある。午前中は隊長、副隊長は公用でオフィスへ行き隊員は気ままな時を過ごす。

最後の食事をスングリとラクパが心を込めて作ってくれる。新鮮な野菜をふんだんに使った料理で、私は今回インドで口にしたいすべての料理の中でこの時の料理が一番うまかったと思っている。

昼過ぎにホテルに入り、久しぶりにシャワーを浴びる。街へ出て果実とサモサとパッコーラを買い込んでまた酒盛。夕食時、行く者と帰る者、再

度「こまくさ隊」と交歓会をもつ。福島の岳人達の成功を祈る。

8月23日 スリナガールへ。軍の都合による通行禁止時間があるため4時に出発。スリナガール行きのバスが満員でなんとか便乗させてほしいと言ってきたドイツ人トレッカー5人と同乗。来る時は感動して通過したゾージ・ラ峠も、帰路は眠むたさもあって無感動に通過。バスは快調にスピードをあげ1時半スリナガール着。インターナショナル・ホテルで荷物の整理など。我々はダル湖に浮ぶハウスボートという舟をホテルに仕立てたところに泊る。スングリとラクパはここに1泊した後、トラックでデリーまで帰り次の仕事につくという。1月近く共に過してきただけに別れがたい思いである。

シカラという小舟に乗ってハウスボートへ。アボロイレブン・デラックスといういかにも観光地風の名の舟が我々の宿。しかし、たしかにデラックスでバスつきの個室が4つ。応接間、食堂も木刻の装飾がほどこしてある。応接間でくつろいでいるとシカラに乗って物売りが多勢やってくる。感心する程の饒舌と根気で「ともだちプライス」とか「ノーたかい」とか、あやしげな日本語を交えて土産物を売りつけようとする。

夕食後街を散歩して帰ってきたらシカル社の人が来ていて、実は明日のデリー行の飛行機の席が取れていない、出発は26日になると言う。これでタジマハール・ホテルでのサクセス・パーティーはパー。同時にこの国の首都は往復とも通過するだけとなってしまった。しかし仕方がない。これまでこんなに順当に來たのが不思議と思わなくては……。

8月24日～25日 スリナガール滞在。24日角田氏は空席を待って1人デリーへ飛んで隊の残務に当たる。残る隊員はシカル社のドジのおかげで2日間余分にスリナガールの休日をプレゼントされたことになり、ビールを飲んだり、泳いだりシカラに乗ったり、買物をしたり、街を歩いたりゴロ寝を楽しんだり、原稿を書いたりして過す。しかしみなこのデラックスなハウスボートも3日は永すぎたようであった。25日の晩、特別料理をたのみ、ラーツ氏の友人も招いてささやかなサクセ

ス・パーティーを開き、日印交歓の夕べを持つ。

8月26日 帰国の途へ。スリナガル空港で永く待たされた末、4時ようやくデリー着。デリーを何も見ずに帰るのは気の毒と角田氏がわずかな時間をさいて大久保、坂入、天城の3名をコンノ

ート広場に案内してくれる。こうして8時50分しばらくインドに残るという角田、細貝、熊田との別れを惜んで本隊4名は一路成田へと飛び立った。
(天城敬彦・記)

— H K E '83 行動表 —

	タンゴール 3,350m	B・C 4,100m	C・1 4,900m	C・2 5,400m	C・3 6,300m	Summit 7,135m
7/31		全員				
8/1		全 員				
2		● 飛・天・大・坂	角・細・熊			
3	飛・天・大 坂 角		細・熊			
4		坂 飛	● 細・熊 角・天・大 飛			
5	● 坂	細	角・天・大・熊			
6		坂 細		角・熊 飛・天・大		
7		坂	● 天・大 細 飛	角・熊		
8		飛・天・大・坂		細 角・熊		
9			飛・天・大・坂		角・細・熊	
10		細・熊			飛・角・天・大・坂	
11		● 細・熊 飛・角・天・大・坂				
12		● 全員				
13		● 飛・天・大・坂	角・細・熊			
14			飛・天・大・坂	角・細・熊		
15			飛・天・大・坂	P 5,600m	角・細・熊	
16				角・細・熊 ● 飛・天・大・坂		
17		全 員				
18						
19		全員休養				
20						
21	全 員					

各係の報告から

装

共同装備

共同装備の基本方針として、幕営用具及び生活用具に関しては、H A J のインドデポ品を利用し、インド調達を原則にし、国内からの持出しを最少限におさえることにした。

登攀用具及び消耗品は、国内の冬山において、使用し、信頼のおける用具・使い易い用具を選び、国内調達を基本とした。

インド・カシミール地方のヌン・クン山群の気候と気温との関係、使用状態、数量の過不足等気づいた点を用具別に列記してみたい。

◎幕営用具

テント B C では、エスパース、ダンロップ、ヒマラヤ山荘テント使用。C 1 以上ではヒマラヤ山荘テント使用。B C、C 1 以上とも昼夜の温度差が激しく、昼間テント内で過ごすためには、入口が大きく開いて、裏に風が抜ける構造になっているのが望ましい。その点ヒマラヤ山荘テントは、入口が大きく通風性がすぐれている。ただC 1 以上で使用する場合、入口に付いているかやはうっとうしい。

8月期のヌン・クン山群登山の場合、気温が下がっても-10℃位までしか下がらないので、霜がつくのを気にしなければ、内張、外張ともにそれほど気を使わなくてもよさそうだ。

ツェルト C 1、C 2 で荷物の上にかけて、シートとして使用。他、アタック時に携行。

ベグ グランド用のベグは、まったく使用しなかった。B C、C 1 では石、C 2、C 3 はスノーアンカー使用。

断熱シート 厚さ約10mm、たて2 m、横1 m のペフマットを使用。弾力性があり、断熱効果もすぐれていて、居住性が良かった。

ガスコンロ ガスコンロに関して、C 1 ではつばめとE P I 併用、C 2 以上ではE P I を使用した。つばめは、デポ品の残があったから使用したのだが、火力が弱く、上部キャンプでは、時間が

備

細具 登

かかりすぎて使いにくいと思う。E P I の使用量は、ほぼ1日1テント当り1.5本見当だった。

コッフェルセット フライパン、なべ中・小、やかんのセット。テフロン加工のフライパンだったので、サラミとかもちを焼くのにこげつかず便利だった。

テルモス 3本持って行ったが、実際に使用したのは、アタック時1本だけだった。

◎登攀具

ザイル 9mm×40mザイルは持って行ったが使用せず、8mm×50mのフィックス・ロープをアタック時にメイン・ザイルとして使用。

シュリング ナイロン6mmを使用。1ロール100m持って行き現地で1m×60本、2m×40本に切り使用。ほとんど1mで間に合ったが、何本か長いものがあつた方がよい。

スノーバー スノーバーは、短い35cmのスノーバー10本と60cmのスノーバー25本を使用した。35cmのスノーバーは、短くて、単独(1本)で使用するには信頼性にかける。せめて60cm位の長さはほしい。35cmの方を使用したところは、ほとんど2本ずつ打ち込んだ。

フィックスロープ 8mmのP P ロープを使用。200mロールを8つ現地まで持って行き、すべて50mの長さに切り使用。P P ロープはキンクがひどいので、なるべくキンクを取る様に使う事が必要。1600mすべてフィックスして残なし。ヌン西稜に関しては、1600mあれば足りると思う。

スノーアンカー ルート工作には使用せず、テントのアンカーとしてのみ使用した。テントのアンカーとしては十分だった。

旗ざお 当初、インドで篠竹が入手出来るはずだったが、現地に篠竹が無いというので、柳の様な木を代用として使用した。竹より少々重いのが、篠竹の代用には十分になる。どうしても竹を使いたい場合は日本から持って行った方が良さそうだ。

ハーケン類 アイスハーケンのコの字型ハーケ

ンは氷壁のルート工作には信頼感を欠く。特に日差しの強い地域では不安感があるが、岩壁がある場合、広いリスには有効にきく。

コの字型に比べて、パイプ・スクリューの方は、氷壁の支点にした場合抜けにくい、深く回し込めない、こまめにチェックする必要がある。

今回のルートに関して、スノールートだということを知っていたので、ロックハーケンをまったく用意しなかったが、2～3ヶ所ロックハーケンがあれば、という所があった。ロックハーケンを数本持参すべきであった。

カラビナ 個人用カラビナ3枚以外はほとんど使用しなかった。

その他

トランシーバー ソニー・リトルジョンを使用。出力が500Wしか出ないので、山の陰に入ると交信状態がきわめて悪い。BC～C1～C2間の交信は悪かった。同時期に入山していたスペイン隊は、ICOMの144KMHを使用していたが、比べ物にならない程受信状態が良かった。ただ、現在インドではICOMの使用は認められていない。リエゾン・オフィサーも使用していたので、こっそり持ち込めれば使用には問題なさそうだ。

乾電池 ほとんどがラジオ・カセットの使用で消耗した。多くカセットを持って行く場合は、BCに単1で動く大きいテレコを持って行った方が電池は使わずに済むと思う。ヘッドランプ・トランシーバー分としてはおよそ単3電池80本位だった。

ライター 100円ライターを各キャンプに配したが、なくなっても苦にならないせいなあちこちでころがっていた。

食 糧

食糧計画を作るに当たっては、まず大きくベース食と高所食に分け、ベース食はできるだけインドで調達し若干の副食を日本から運び、高所食は重量と値段を考えながら日本でそろえ、梱包して空輸することを基本とした。そして次のような順序で作業を進めた。

①行動予定表に従ってそれぞれのキャンプごとの人日を計算する。

ホカロン 全部で20個持って行ったが、使用したのはわずか1個という状態だった。夏期の登山でヌン位の山だったら必要ないと思う。

その他 予備として持って行ったアイゼン、スパッツ等は使用しなかった。ただ、梱包用として持って行ったガムテープは、何回かの再梱包で足りなくなってしまった。梱包用のPPテープとかガムテープは多めに持って行った方がよい。

個人装備

個人装備は、各人日本の冬山で使い慣れている用具を持参し、登山隊としては特別な物は用意しなかった。ただ、ヌン・クン山群の気候を考えて、靴の濡れに対して各自対処の様申しあわせた。

衣類 特に日本の冬山と異なる様な服は必要ではない。気温も-10℃位までしか下がらないから、日本の冬山より暖かいと考えていい。ただ、7,000mを越す高所という事を忘れないで、特に、足や手の末端の保護は完ぺきにすべきだ。気温以上に高度による冷えが厳しい。

靴 特に高度順化の遅い人は、手足がしびれる様な感覚になり、少しの温度低下でも、厳しい冷え込みに感じる。手足の感覚は無くなり、まひしてくる。靴の保温性は特に重要で、出来れば、二重靴でもオーバーシューズはつけた方がよい。

登攀具 各人各様の登攀具を使った訳だが、下降にさいして、PPロープのキンクを考えて下降器はエイト環は禁止にして、ヒラリー環に統一した。シャルレのアイゼンを使った者の中で幅調整のジョイント部分がこわれた例があった。

● 天城敬彦 ●

②基本献立案を作り隊員の意見を聞いたり、山行合宿のときに試食してもらったりして必要な修正を加える。

③重量、予算等をにらみながら最終案を決める。

④買出しをし、C1、C1スペシャル、C2、C2スペシャル、C3そしてベース食に分け、高所食は1食ごとに小袋に分けて梱包し、それを1ボックス12～13kgの見当でバックする。現地調達

品のリストを作る。

②の段階で試食してもらったなかで好評だったものはフリーズドライの納豆と永谷園のマーボー春雨。逆にマウンテンハウスのドライフルーツは値段に合わない、フリーズドライのひじきはびちゃびちゃして歯ごたえが悪いという理由で却下された。参考のために高所食の献立のみ表示する。

朝 食

①ラーメン、もち	②雑煮（もち、ヤキトリ缶詰、調味料）
③テン普拉そば、もち	④お茶漬

夕 食

①ワンタッチライス、カレー（レトルト、F.D）みそ汁	②おこわ、マーボー春雨、ホーレン草（F.D）、みそ汁
③ワンタッチライス、親子丼の素（レトルト）、漬物、みそ汁	④おこわ、納豆、キンピラ、魚の缶詰、みそ汁

干魚、お茶漬の素、鰹節、のり、梅干、しいたけ、大根おろし（F.D）、油あげ（F.D）等を副食としてスペシャルボックスに入れ、適宜用いた。

今回の遠征は日数や人数が少なく、したがって食糧を買うにしても1社当たりの食品の値段もさほど高くないため、手間暇かけてメーカーを回ることはやめにして、安目のスーパーマーケット等でまとめて購入した。またH A Jカンチェンジュンガ遠征等の残りの食糧からワンタッチライス、乾燥みそ、コーヒー、乾肉等をいただくことができたため予算的に余裕ができ、フリーズドライ食品、缶詰等少々ぜいたくなものを買うことができた。感謝したい。

よく遠征隊の任務分担のなかで、食糧担当というのは損な役回りだと言われている。高所に行けば食事は大きな楽しみである。しかし高所食とし

て持っていけるものには自ずから限度がある。隊員の食事の好みも千差万別である。したがって全隊員が満足する食事を用意することは不可能である。しかし食い物のうらみは恐ろしい。食事に対する不満は食糧担当者に集中する。

登山活動を終えてから、恐る恐るみんなの感想を聞いてみた。しかしなぜか不満の声は聞かれなかった。これはみんながやさしいのか、みんな味覚音痴なのか、あるいは食糧担当者の人徳のいたすところなのか、ともかくはこれで何とかうまくいったということらしい。

ベース食は、登山隊で用意したものとエージェン트가用意したものがいっしょになってしまったし、また順化が遅れて下ってきたスペイン隊にも食事を出したこともあって、どうも私には全体像がつかめていない。ついてくれたコックがダージリンのシェルパ族で、しかも過去4回日本隊のもとで働いたことがあるという人で、日本人の口にあうものを作ってくれたこともあって、ほぼコックまかせであった。あらかじめ考えていた献立はないに等しく、材料を見ながら適当に指示を出せばうまくやってくれていた。

最後に、いくつか気付いた点を挙げておきたい。今後、何かの参考になれば幸いである。

①米を1人1食当たり150gとしたがこれは多すぎた。日頃健康家の隊員も高所ではなかなかこれだけ食べられない。かなり順化が進んだ最後のころでも1人当たり120g程度しか食べていない。したがってかなりの米を残してしまった。しかし計画段階でみんなの食が落ちることを前提とはしにくく、やむをえないことだったのかもしれない。

②計画通りの献立で実際に食べてもらうことはほぼ不可能にちかい。私とすれば、そのほうが食べいだろうと手間をかけて1食分ずつ小袋につめたのに、うまそうなおかずを選び出してバラバラに食べられてしまう。少々腹も立ったがこれはたぶん仕方のないこと。計画はあくまでも計画。どうも献立は食糧計画の全体像をつかむためのステップ、目安と考えた方がよさそうである。ただし量の把握はしっかりしておかないと、大変なことになる。

③もちを多目に持っていたがよく売れた。日

本人の口にあらうらしい。しょうゆをつけて、テフロン加工のフライパンで焼いてよく食べたものである。

お茶漬の素も重宝した。食欲がおちて米がのどを通らないときに無理矢理流し込むのである。いささか味気ない話であるが。

④高所では、手持の材料のなかで色々工夫してみることもひとつの知恵であるし楽しみでもある。乾した小魚にしょうゆをからめて煎ったり、

サラミとF、Dのホーレン草をいためたり、けっこう色々なおかずができるものである。ベースキャンプでは、あたりに生えている野生のネギを採ってきてさっと茹で、わかめといっしょに酢みそであえたら大変好評であった。

⑤各キャンプで沸点を実測した。B C約4,100m 83度、C 1約4,900m 78度、C 2約5,300m 73度であった。残念ながらC 3では測っていない。

医 療

大久保博

使用頻度の多い薬、重要と思われる薬から述べる。

①無酸素登頂をめざすからといって全く酸素を持たないのは、非常識も甚しい。幸いH A J隊には、インドにデポ品があり、輸送等のトラブルもなく用意できた(酸素ボンベ3本、レギュレーター2個、O₂バック7本、O₂発生器2本、O₂マスク6個)。実際、肺水腫の疑いがでた隊員にすぐに酸素を吸ってもらい、他の隊員ともども急速に安心することができた。

②抗生物質について、副作用のことを考えてピリン系非ピリン系あわせて600T持っていた。量的に半分で充分。細菌性の下痢には、これを投与することによって2、3日で快方した。

③感冒剤は、50Tしか用意せず、底をついた。

④鎮痛、解熱剤として、パフファリンを200T用意し各隊員に必要な量を配り個人薬としたが、解

熱剤として他に用意すれば良かった例があった。

⑤消化剤も個人薬として配ったが、高所における消化力低下、食欲低下に必要な薬だった。

⑥ビタミン剤は、アリナミンなど300T用意、各自飲むようにした。

なお、凍傷防止に速効性のあるユベラニコチネート軟こうを用意した。6000m以上における寒さは、低酸素という条件が加わりそれ以下における寒さとは、極めて異なる。それをわかっていながら、C 3への荷上げの段階で、下部キャンプに置いたままで、アタック隊のメンバーに上述のちがいを体験させてしまった。大事に到らなかったが反省している。

⑦陽焼け防止にホワイトトリップを使用した。

⑧外用薬としてムヒ、殺虫剤、蚊取り線香は、登山前後に有効であった。

⑨体温計を各キャンプ用に3本用意した。

会 計

角田不二

例年のH A J登山学校と同じく、インドでの殆どのアレンジをエージェント(シカール社)に任せた。そのため現地経費はシカール社への支払いが最も大きくなっている。

ただし、例年と違う点は先発経費を全く含まないこと、本隊のデリー滞在をフルボードでなく、ベッド & ブレックファストとしたこと、ハイポーターを雇用しないことである。が、現実にはタンゴール村のローカルポーターがB C ~ C 1間において延べ11人稼動した。

I M Fの会議出席のため、デリー滞在が長びいて、後発滞在費がかさんでしまった。

1. 収 入	4,250,000
2. 支 出	4,221,020
1) 渡 航 費	210,000 × 7 = 1,470,000
2) 装 備 費	159,050
3) 食 糧 費	187,680
4) 医 薬 費	30,000
5) 梱 包 費	6,400
6) 輸 送 費	226kg 225,094
7) 通 関 費	16,500
8) 登 山 料	7,500 R S 211,549
9) エージェント費	5,920ドル 1,432,660
10) 通 信 費	26,961
11) 事 務 費	25,490
12) 外 貨 払 分	429,636
3. 差引残高	28,980

メン登山隊に参加して

遠征を終えて 天城敬彦

二十台の半ば近くなってささやかに山登りを始めた私が、ヒマラヤの地に足を踏み入れることがあろうとは考えてもみなかった。それが機会に恵まれて遠征隊に加わるようになった。

私自身は山頂に立つことはできなかった。しかしそれでも十分に満足できた。高所での息の苦しさは予想以上であり、呼吸に合わせてリズムカルに歩くことなど、ほとんどできなかった。したがって歩くスピードもかなり落ちていた。しかし決められたローテーションの中で、何とか隊員としての役割は果たしえたと思う。

山は本当に美しかった。第3キャンプに荷上げの日、眼下に広がるキシトワール山群を見ながら、苦しい息づかいのなかで急な雪壁を登っているときに、ほとんどエクスタシーに近いものを感じていたこと、標高の為かいつまでも朱が消えぬ夕暮時、つかれたようにその光景を心にやきつけようとしていたこと、1週間ぶりに下ってきたベースキャンプが、そのわずかな期間のうちに花の咲き乱れる別天地と化していたこと、撤収の日、重い荷にあえぎながら、背後のメンと、はるか彼方に白く輝くK2をはじめとするカラコルムのジ

ャイアントやナンガパルバットに別れをつけていたこと等々今でも鮮かに思い出すことができる。

35日という限られた日数であったため、インドの風土、文化といったものには殆どふれることはできなかった。しかしわずかな接触ではあったが、それぞれの風景や人との出会いの一つ一つを容易に気に入ってしまえることができた。「インドから拒絶され」てはいなかったと思う。できることならば今一度、インドに、そしてヒマラヤに行ってみたいと思っている。

遠征から帰ってもうかなりの日時が過ぎてしまった。半月程は余韻の中にいて、それから環境の変化に改めてとまどい、鮮烈だった印象もおちつき、今はあいも変わらぬ不況下の中小企業で、展望を求めながら重苦しい日々を送っている。今思うに、よく思いきって行ってきた。そして同時に、このような状況で快く送り出してくれた職場の人たちに改めて感謝している。

最後に、遠征を通じてお世話になった方々、そして飛田隊長をはじめとするさわやかな仲間たちにお礼を申しあげるとともに、たぶんもう二度と逢うことはないであろうラーツ氏、アショク氏、スングリ、ラクバ……の未来に幸多からんことを祈っている。

おわった夢そして新たな夢 大久保 博

C2への荷上げでスノープラトー上にあがって間近にやっとメンの頂を眺めその感激もさめやらぬ8月7日、4900mのC1での休息時にこんな詩をつくった。

この空気俺のもの
さあ、水汲みだ 氷河の水は青い
さあ、足を出そう
ひと息ひと息 生きている証を感じて
この空気 俺のものだ
碧い空と青い水は冷めたい
俺の中で赤く炎えて

さあ、あの白い頂に立とう

8月15日 アタック前日 5400mのC2で、や
や、やけくそで、こんな詩をつくった。

共 有

友は今 燃える心を持ち
我は今 醒めたる心を持ち
友は 碧空のひとさしに向って飛びたとう
として静かに横たわる
我は 虚空の一点を見つめ飛びたつ
君を熱いまなざしで思う
そして、8月16日には、登頂した3氏は、疲れ

た様子でC2に帰って来た。しかし、登頂に満足な顔、顔、顔であった。私はその夜こんな詩もつくった。

私は今

私の心は 今は貴女のもとに

戦いに疲れた私は 今は貴女のもとに

帰るしかない

私は 私の夢を追ってここまで来たけれど

今は 夢さえも貴女にうばわれた

私のからだは 夢を夢のままにしまう

ほど弱かったのだ

私は今 非力なままに帰る

この遠征で得たものは大きい。ヒマラヤの神々の座の中で、自分なりに戦えたということは一

BCの休日

細貝 登

朝、キッチンボーイ・ラクパの声「チャイ・プリーズ」でようやく8時に目が覚める。1日の始動である。といってもだいたいやる事が無い連中ばかりである。8時30分に軽い朝食を取った後は、またすぐ横になる者、カメラを片手にあちこちうろつく者、だいたいバラバラで、同じ行動を取る者はめったにいない。going my wayをもって遠征隊は成り立ってる様だ。おおかた何日かみていると、一人の行動パターンは決っている。何かしないと落着いていられない者と、一日中、ポケットとして何もしない者とはっきり分れる。まったく何もしないでゴロゴロしているのもいたものだ。1日で歩く距離がなんとキジへ行くだけの歩行距離しかないのだからおどろく。良く動く者は食事の時以外はどこに行っているか分らない。それと1日中よくあきもせずにとランプをしている連中。一度テントに入ったきりまるで出てこない。あの辛棒強さには感心してしまう。

BCの昼めしはわりと変化があり楽しい。日本から持って来たスペシャル食のそうめん等、日本食もどきが食べられる。

昼食が済むとまた午前中と同じパターンがくり返される。ゴロゴロする者とチョロチョロする者と、まったく良くあきもしない。

つの自信となった。だが、C3への荷上るの時、氷壁の途中で履いていたアイゼンを落すというなんともしまらないことをやって、隊長の飛田さんから怒られたりした。そして、それらを含めて技術的未熟さがアタック隊に入れなかった大きな理由だと思った。8月12日にアタックに対する隊長の考えが発表された時、飛田さんの登山半ばで登頂をあきらめなければならないサポート隊に対する心づかいが痛い程わかったものだ。私は、どんな小さな遠征でも、隊として成功するか、きれいな遠征をするかが、いかに大切かという事を肌で感じた。そして、新たな夢として何年先になるかわからないが、またより大きな神々の座にまみえることを念じて止まない今の私がある。

午後6時、待望のミーティングが始まる。時には真剣に話し合うこともあるが、だいたい酒宴となる。カナサーブが用意する旨いつまみとディナーがでだんだん調子があがってくる。夜の9時頃まで、ミーティングが延々と続く。調子はずれの歌を歌い、わい談をして……。

いつまでも飲んでいるのは、また決っていて、ぐずぐずと遅くまで飲んでいる。BCの休養日は、まったく平和そのものの顔をしている。



アタック隊の帰還

初めてのインドそしてヒマラヤ 坂入一彦

自分がヒマラヤに行く、それは夢にも思っていない事だった。田舎の小さな山岳会では別の世界の出来事のように時々話題にのぼる程度の関心しかない。参加が決ってもピークに立てるとは思っていなかった。これまでの山行を考えても7,000m級の山に登れる技術、体力があるとは思えなかった。それなのになぜ参加したのか。“もしかしたら登れるかもしれない”の一語に尽きるだろう。ピークに立てなくとも自分の能力を試してみたいと思った。

結果としてピークに立つ事はできなかった。B C入りして3日目に肺水腫ではないかとO₂を吸ったり、スペイン隊のドクターに問合せたりの大騒ぎ。タンゴールに2日間下った時にはピークはすっかり縮めた。それからは体調もよくなり、天候不順のおかげでC3まで行った時にはピークに立てるのではないかと思った。しかし最後の斜面を目前にする事なく下山することになった。ヒマ

ラヤはあまりにも大き過ぎたのか……。心の底に燃え切らないものが燦っている。その反動なのか山よりもインドの人々に対する印象が強く残っており、興味が大きく膨んでいる。インドのさまざまな環境とそこに住む人々が日本とはあまりにも異なる事にショックを受けた。緑豊かな平原に住む人々。荒涼たる砂漠の中のわずかな緑地にしがみついて生きる人々。現代と古代が雑居している都市に住む人々。いつごろからその場所に住み、そのような生活を始めたのか、どんな事を考えつつ生きているのか、幸福なのだろうか……。興味は尽きない。北部のいくつかの街を通過しただけなのに強烈な印象を与えるインド。この広大な大陸を隅々まで歩いたらどんな人に会い、どんな風景が見られるのか、再びインドを訪れる日を考えてしまう昨今だ。最後にお世話になった方々と隊員各位にお礼申し上げます。

二度目のヒマラヤ

熊田雅史

1981年、初めてヒマラヤへ遠征した。出発前の準備では見る物、聞く物すべて初体験といった感じでもうすでに異国にでもいるかの様なかで隊荷の集荷から梱包と出発までこぎつけた。つくづく自分の能力の無さを実感したものである。先発で出発する時には、大金をフトコロに抱え、初めての旅への期待と不安で緊張した。秋、遠征は失敗に終わった。仲間2人を失い、打ちひしがれた思いでカトマンズにもどった。待っていたものは、同じ時期に起きた日本隊の遭難の知らせであった。遠征の残務処理を終えたが、日本へは帰らず1人インドへ向った。頭の中に山のことは無かった。山を始めて以来10年余り、頭の中から山が離れることは無かったのにまさに空白の時が過ぎた。帰国してもしばらくの間はインドボケも直らず、山へ行く

気も起きず怠惰な日々を送っていた。秋になり、この冬は山へでも行こうかという気になってきた頃、飛田氏と知り合い、12月に穂高へ行った。その後ヌンへ誘われたが、かなり迷った。しかし行く事を決めた、当時の自分の環境からすればかなりムチャクチャな事ではあった。アルバイトで生活している身にとって遠征資金を作り出す事はむずかしく、幾つかの職をかわった。結果的にまわりの友人や先輩に迷惑をかけ、好意に支えられての参加であった。山を想う時、7000m峰は無視できないものであった。再び山をやろうと決めたのは自分自身の忠実な気持ちであった。とにかく登らねば、という思いだった。ヌンは成功し、終った。これからの事はまだわからない。自分の人生と山を計りにかけながらやっていきたいと思う。

HAJ (HIMALAYAN ASSOCIATION OF
JAPAN) 1983
KASHMIR EXPEDITION TO MT. NUN
(7,135M)

Members:

Kazuo TOBITA (37, Leader)
Fuji TSUNODA (30, Sab Leader)
Takahiko AMAGI (36)
Hiroshi OKUBO (34)
Noboru HOSOGAI (29)
Kazuhiko SAKAIRI (28)
Masafumi KUMADA (27)

Liaison Officer; FIT LT TK RATH
(Air Force, 32)

Cook; SUNDER Sherpa (35, Darjeeling)
LAKPA Sherpa (17, Darjeeling)

July 17 Tsunoda arrived at New Delhi
by air. He contacted IMF (Indian Mountaineer-
ing Foundation) and our Travel Agent (Shikhar)
for the expedition.

July 25 Main party arrived at New
Delhi by air.

July 29 All members arrived at Tangol
via Manser, Srinagar and Kargil which is the
last village to Mt. Nun and is situated on the
right bank of Suru River.

July 31 We established Base Campe (BC)
at the altitude of 4,100m. on the plain of
left bank of Sentik River.

All equipments and foods etc. about 500kg
brought up from Tangol to BC by twenty-
seven porters of Tangol village in one day.

August 2 From there we climbed up
along the Sentik River and Sentik Glacier for
about 4 hours and at the left bank of Sentik
Glacier established Camp 1 (C1) at the
altitude of 4,900m.

August 6 We climbed up an ice fall of
about 400 meter and reached the snow plateau.
From there we walked about 3 kilometers
on a snow plateau of a gentle slope and

established Camp 2 (C2) (5,400m) at the
south edge of the plateau. On the snow
plateau we stuck red flags in the snow as we
went along so that we would not lose our way.

August 10 We arrived at a pass of
west ridge via the rock ridge—we called it
KANINO HASAMI—at 19th pitches fixed
rope from C2. It was a very steep and risky
slope. Via the snow-building, we established
Camp 3 (C3) (6,300m). at the edge of narrow
snow plateau above the west ridge.

August 11 All members rested at BC.

August 16 Summit party reached the
top of Mt. Nun at 9:35 a.m. after about four
hours climb from C3. It was led by Tsunoda
and included Hosogai and Kumada. It was a
fine day. They could see K2, Nanga Parbat
and many other peaks. Soon, the leader,
Tobita, members, Amagi, Okubo, Sakairi
caught this good news by walkie talkie at
C2. Summit party climbed down to C2 via
C3, on that day at 5:30 p.m.

August 17 All members came down to
BC.

August 21 All members gathered at
Tangol and immediately went to Kargil by
truck.

August 23 All members reached Srinagar
by vehicle and stayed there for four days.

August 27 Main party came back to
Japan via New Delhi by air.

We are very grateful to M/S IMF and
J & K govt. and also all persons who were
helpful to us in our expedition.

協力者名簿（敬称略）

浅野勝己、天城素子、稲田定重、尾形好雄、

小泉乙也、清水洋子、田中清子、野島照雄、

／＼嶋寛、吉田憲司

ICI石井スポーツ、婆娑羅衆、法政大学二部山岳部、

前橋山岳会、水戸葵山岳会、明大駿台山岳部

NUN登頂'83

——ボクらは遙にK2をナンガを見た——

H A J カシミールヒマラヤ遠征隊1983年

1984年1月1日 発行 定価500円

1983年日本ヒマラヤ協会カシミール遠征隊 編

編集責任者 大久保 博

発行所 日本ヒマラヤ協会（H A J）

〒160 東京都新宿区高田馬場2-23-1

淀橋食糧ビル506号

電話 03-367-8521

印刷所 ㈱友心社

〒101 東京都千代田区三崎町3-1-18

近江ビル4F

電話 03-234-6437

